

# グアム日本人学校 今後の学校経営にかかわる Q & A

## Q1：一部「複式学級」について、どうして導入を検討しているのですか。

A1：「子供たちの『学びの保障』を将来的に確実なものとするため」というのが、大きな柱にあります。その上で、本校の以下の課題を解決していくために、数年後の本校の現状を予測し検討してきました。

### ① 子どもたちの学びに関する課題

新学習指導要領では、今までのように個別に知識を蓄えることに重点をおくのではなく、「主体的・対話的で、深い学び」を実現しつつ、知識や技能を「どのように学ぶか」またそれら持ちえた知識を「どのように使うか」が重視されています。これからのグローバル社会に向けて、毎日の授業の中で多様な意見を知り、子ども同士が目標を共有し力を合わせて活動をしたり、対話的な活動をしたりしながら自分の考えを広げ深めるような学びの視点が重視されています。

本校の学級人数の平均は一学級当たり 6.6 人です。導入された ICT をより活用し、対話的な学びを実現するためにはもう少しまとまった人数が一クラスの中に必要です。本校は確かに全学年仲が良く、全員がお互いの事をよく知っています。しかしながら、授業と生活での学びは全く違います。授業というオフィシャルな場で多様な意見を考えられる環境を「複式学級」を導入することで、整えることも学校の責務であると考えております。

### ② 子どもたちの支援に関する課題

子どもたちは一人一人、多様な課題をもっています。行動がゆっくりな子、感情をコントロールできない子、など様々です。在外教育施設である本校は特に日本語力の差、またそこからくるコミュニケーション能力の不足が原因で、生活指導上のトラブルが起きることがあるのではないかと考えられます。そのような困り感をもった子どもたちに支援を行うには、やはり支援をする大人（教員）が必要です。さらに今後は、子どもたちが感染予防等も徹底した上で、安全に学校行事を行うにもある程度の人数の教員が必要になってきます。担任外の教員を確保するためにも「複式学級」を取り入れていくこととしました。豊かな人間性を育むために必要であると考えております。

### ③ 今後予想される教員不足に関する課題

現在、コロナ感染拡大する中、本校の児童・生徒が日本へ帰国したり現地校へと転校したりして子供の数が減少しています。コロナが収束しない状況では、今後日本人学校に在籍する子供の減少がさらに予想されます。文部科学省からの派遣教員は、在籍数に応じて派遣数が決定します。派遣教員が減少し、日本の教員免許をもった現地採用教員の確保困難が続くことになれば、学級担任や担任外教員が不足となり、学級経営や学習指導が成り立たなくなることが予想されます。そこで、見直しをもちながら、教員不足に対応するためにも、「複式学級」の導入を検討しているところです。

## Q2：導入する場合の、具体的な一部「複式学級」の導入計画を教えてください。

A2：今までも国語（図書、書写）・算数・理科・社会・道徳・学活・総合以外は基本的に複式で実施してきました。来年度から年間指導計画の国語、算数以外を 2 年計画で再整理します。具体的には 2 年を A 年度（奇数学年内容多め）と B 年度（偶数学年内容多め）に分け、偶数学年と奇数学年の学習内容が毎学期大体 7：3 になるように組み直します。例えば来年度 3・4 年生の 1 学期に 6 枚のテストがあるとして、約 4 枚は 4 年生のテスト、残りの 2 枚は 3 年生のテストになるように学習計画を立てます。ただし、来年度は B 年度で移行期になるので偶数学年はすべての学習内容を実施します。また本校は日本の公立学校と違い、年間 40 週以上（日本は 35 週）の授業週を行い、なおかつ全学年がオール 6 時間（月金は 7 時間）で実施しているため、200 時間近い余剰時間があります。その時間を活かして、未履修内容がでないように常時学習内容の確認をしていきます。また、国語と算数はこれまで通りの単学級授業になるので、空いた教室を使い、各学年の担任と担任外の教員で授業を展開します。

行事に関してですが、こちらは今までも2学年や3学年を合同で実施していました。複式にすることで、今まで以上に行事等の練習や打ち合わせはスムーズにできるようになります。修学旅行や宿泊学習は再考が必要です。来年度は複式学級ごとに宿泊を行う、6年生の修学旅行時は5年生の仮担任を担任外が受けもつなどの工夫が必要です。

**Q3：一部「複式学級」の導入を段階的に実施することはできないのでしょうか。**

A3：可能です。例えば、1年目は学級のみを複式学級編成にして、今まで複式で実施してきた副教科＋学活や道徳、総合などを複式授業にすることも考えられます。その場合、時間割を工夫し、国語・算数・理科・社会を単学級指導として空きの教室を利用して行います。その後、複式のメリットをいかすため複式の教科を増やしていくことは可能です。ただ、基本的に2年計画になるため、2年ごとに年間指導計画を見直していくことになります。

また、人数制限がクリアできた学年ごとに複式学級に移行していくことも考えられます。その場合も年間指導計画の年度を揃えるため、2年ごとの見直しになります。

**Q4：一部「複式学級」を導入する場合、グアム政府が発表している人数制限はクリアできるのでしょうか。また、クリアできない場合はどうなるのでしょうか。**

A4：現在、2月19日付の知事令によりグアムはPCOR3の状態であり、本校も当然ながらグアム政府の指示に従うこととなります。仮に来年度から複式学級になった場合のクラス人数は1・2年生が14名、3・4年生が18名、5・6年生が15名です（2月26日現在）。現時点での各教室収容可能人数は確認中ですが、その制限人数を超える場合は制度的に複式学級を導入することはできません。その場合は現在と同じ単学級編成になります。ただ今後、上記に記載した課題は残りますので、今後も「複式検討委員会」を定期的に関き、柔軟に議論をしていくこととなります。収容人数の確認結果については、重要なお知らせですので複式学級導入にかかわらず、早めに保護者の皆様にお知らせできればと思います。

**Q5：日本などへ転出する場合、また逆に転入する場合、未学習部分はどうなるのですか。**

A5：例えば、社会と理科ですが、まず標準時数が週2～2.6時間のところを本校は週3時間で行っています（全学年6時間編成、体育は運動会等で調整するため）。そのため年間では社会と理科ともに約20時間、各学期に7時間ほどの余剰時間があります。その余剰時間10年間30回の裁量の時間を使い、フォローしていく形になります。場合によっては担任外の教員が裁量の時間に対象児童を取り出し、補填授業を行うことも考えられます。また社会と理科は、学年選択制単元、領域ごとに繰り返し学習する内容も多く、国語や算数より未履修の学習フォローをしやすいという教科の特徴もあります。ただ、転出入の時期や転出入先によってケースバイケースなので柔軟に対応していく必要があります。

**Q6：学校理事会では「来年度の経営方針」についてどのような話し合いがあったのですか。**

A6：児童・生徒のコミュニケーション能力の低下、今後予想される児童・生徒数の減少、それに伴う財政難、現地採用教員の確保が困難、文科省派遣教員の人数は限られている等から、根本的な学校運営の改革が必要になりました。また、PTA会長から、日本語が不得意な児童・生徒、保護者の問題についても提議されました。それと同時に、過去において本校でも複式学級制が実施され、大きな成果があったとの報告がありました。

これらの課題を解決するための方策について、昨年後半から、学校理事会において何回も討議を重ねてまいりました。その結果、現状のままではよりよい改革は難しく、抜本的な改革に取り組むべきであると考えました。一部「複式学級制」を取り入れることにより、多くの課題を解決できるという結論に至りました。

**Q7：なぜ英語の体制を変えるのでしょうか。**

A7：英語の授業は本校の特色の一つです。日本の公立学校には週3時間のネイティブによる英語の授業体制はありません。ただ、今まで非常勤で英語講師を採用していたため、時間割上、様々な制約がありました。「子どもたちが集中しやすい午前中に主要教科の時間が取りにくい」「月金以外に実力テストや体力テスト、またスクパや運動会等の全体練習が入りにくい」「中学部の定期テストが3時間目までしかとれない」など様々です。英語講師を常勤で採用することにより、確かに2分割と言う形にはなりますが、上記の課題は柔軟性が増し、英語科以外の授業にも英語科の先生が支援に入れることとなります。また、方針の一つである日本語支援として子どもたちの支援、保護者の支援などにも活用していけることが期待されます。

**Q8：新しく始める「日本語支援」とはどのようなものですか。**

A8：学習の中で、日本語の理解や日本語を話すことが困難な児童・生徒に対して、サポートしていくことです。授業中に学習内容を理解しやすく日本語の通訳をする支援と、授業とは別に個別に日本語の指導を行う支援があります。これらは、保護者からの希望により行う場合と、担任・学校からの呼びかけにより行う場合があります。これらの支援活動を行うことにより、授業中に担任が支援のため止まることなく、落ち着いた学習活動を行う事が出来るという効果があります。ただ、全面实施までには、教員の研修並びに校内体制の整備、子供の実態把握など準備期間を要します。

また、これらとは別に日本語が不得意な保護者の皆様のために、校務分掌の中に「保護者英語対応」も設置します。ご要望に応じて、学校からの文書等でご不明な点に対して対応できるようにします。

さらに、火曜日と金曜日の放課後に補習授業校で実施している「日本語会話クラス」への参加も積極的にうながしていきます。

**Q9：日本の義務教育に準ずる学校とされていますが、児童・生徒が進級できないこともありますか。**

A9：本校は、海外にある、日本の学習指導要領に基づいて日本の教育を行う義務教育段階の学校です。学力や日本語能力の問題でだけで進級できないことはありません。校則規則にあります内容に沿って、該当するような事例が発生した場合は、校内で検討委員会を設置し、様々な視点から総合的に支援体制をまずは整備することから検討し、学校として子供の指導、支援を第一に考えていきます。

**Q10：学校の教育活動にボランティアとして参加できる方法はありますか。**

A10：実際の授業に入り、日本語理解が不十分な児童・生徒の横につき学習支援を行うことや保護者の方で、音楽や図工、習字など得意な技術や技能を生かして指導していただくことはできます。教員免許の有無は問いません。今後登録をお願いしていくこととなります。

**Q11：併設されている【グアム補習授業校】との連携はどのようなものがあるのですか。**

A11：今後は、学校行事と一緒に参加するなど、イベントでの交流が主と考えられますが、教育内容の違いや授業時間帯の違いがあるので、何が可能かを検討していきます。学校組織としては、全日制・補習授業校・幼稚部のそれぞれの管理職・担当教師が定期的に連絡会を開き、連携できる具体的な行事等の内容を検討します。

**Q12： 特別支援教育や日本語支援教育などについて、先進的な取り組みが発表されていますが、グアム日本人学校ではそのような取り組みに参加していくのですか。**

A12：特別支援教育や日本語支援教育を行う場合、専門的な知識や技能をもつ教員が必要となります。また、特別支援教育が必要な子供には、WSC 検査などの特別な検査をして検査結果の分析が必要となるので、専門的な研究が重要となります。本校では、人員数から見て、日本と同様に取り組んでいくことは、非常に困難となります。教員不足などの観点から、全ての児童・生徒の安全を確保するために、要支援の性質、程度によっては、授業中に保護者の付き添いをお願いすることもあります。

**Q13： アフタースクールは、なくなるのですか。**

A13：なくなりますが、放課後活動としては、全日制が実施する学童保育（月曜日～金曜日）があります。これは、担当者は付きますが、学習指導は行いません。児童・生徒が自分で予習・復習をしたり、宿題等を行ったりします。また、補習授業校が午後4時から実施する日本語会話クラス（火・金曜日）や、算数（数学）コース（学年ごと週1回）がありますので、これらにご参加いただければと思います。教員の勤務時間超過が大きく、通常の教育活動にも、学校運営にも影響してきます。校務の効率化や働き方改革についても、今後検討していく必要があると考えております。

**Q14： 日本の学校とのグアム日本人学校の違いを教えてください。**

A14：日本の学習指導要領に基づいた教育を実施しています。日本国内の公立学校との主な違いは、小学生から週4時間の英語の授業があることと、1年生から6時間授業となり、大幅な授業時数の確保が可能となっていることです。

今年度は、コロナ感染防止のために、学校が閉鎖となり年間授業日数は少なかったですが、通常は、年間授業日数と授業時間も多く、日本の公立学校よりも約1.3倍近くの授業時数を確保しています。

また、本校は同じ校舎の中に、幼稚部・小学部・中学部・補習授業校があり、様々な連携が行われています。児童・生徒数が少ない分、異学年の縦の交流が盛んであります。

**Q15：一部「複式学級」を導入することで、学級で問題が起きやすくなるのではないかと考えます。どのように対応し、担任をサポートしていくのですか。**

A15：複式学級で、学級担任を少なくすることで、臨機応変に動くことのできる担任外の教員が確保できます。各学級の支援に入りやすくなりますので、適材適所に迅速に支援、指導にあたることがかかるようになります。それによって、子供たちの問題行動を未然に防ぐなどの対応が可能となります。

**Q16：小学部よりも中学部の方が子供の数が少ないので、一部「複式学級」を行うのは、中学部の方が良いのではないのですか。**

A16：中学部は、高校受験を控えている生徒が多いため、受験の時に提出する内申書に記載する内

申点や学習の未履修が大きな問題となります。社会科も、指導内容が「地理」「歴史」「公民」と各学年で教える分野が異なり複雑です。そのため、複式のカリキュラムは組みにくく、学習進度が大きく変わるので、進学のための実力テストが受けられなくなるなどの問題も出てきます。また、中学部の指導では専門的な知識や学習指導技術が要求されてきます。

**Q17：複式学級を導入した場合、小学部・中学部の「入学式」や「卒業式」はどのようにになりますか。**

A17：今まで通り、一部「複式学級」でも、対象学年で行うこととなります。2学年が同じ教室で生活することにより、協力し合ったり学び合ったりする場が増え、これまでより円滑な学校行事の運営が可能となります。また、時間的な余裕も生まれると考えております。

**Q18：一部「複式学級」を導入する場合、必要な準備とはどのようなものですか。**

A18：ハード面では教室の配置・机椅子の準備・教室内での机位置の確認・ロッカーの準備などです。ソフト面では時間割編成・成績データ準備等、各種データの編成が相当量見込まれます。また、各種行事等の細部まで検討が必要となります。

**Q19：ICT教育のために新たに費用が徴収されますが、その分教育効果は本当に上がるのですか。**

A19：2月22日（月）～24日（水）に、全学年でICT周辺機器等と学習コンテンツを活用したニューノーマルな授業公開に向けて撮影をしました。ホームページにて閲覧できるように準備中です。来年度も引き続き学校の研修テーマとしてICT活用の効果向上に向けて取り組んでいきます。

**Q20：令和3年度の学校経営について大きな変革を行うのであれば、事前に保護者へ十分な説明が必要だったのではないですか。**

A20：ご指摘の通り、保護者の方々への説明が不十分であったことに関しては、大変申し訳なく思っております。新型コロナウイルス感染拡大から始まり、今年度の文部科学省派遣教員がどうなるかという問題に向き合っていく中で、今後の本校の子供たちへの教育活動をどう充実させていくかという思いで検討してきました。しかしながら、定期的に保護者に報告をする、保護者代表者も参加していただく、などの視点が欠けていたと痛感している次第です。グアム日本人学校の子供たちの将来を見据えての変革が必要と感じたことから今回の検討が始まったことはご理解いただければと思います。